

出会い(25)

カミサマ ゴメンネ

奥村 一郎



いつか、毎日新聞の「にじ」という読書欄に「カミサマ、ゴメンネ」という見出しで投稿された次のような話が折にふれて思い出される。

「4歳になるめいが訪ねてきてくれた。男の子ばかりのわたしの家では、女の子がきてくれて、急に一輪の花が咲いたように楽しい日だった。近くに公園があるので、わたしはめいの手をとって、そこに遊びにいった。ひとしきり遊んだめいと、さあ帰りましょうと手をつなぎ、公園の広場を横切ろうとしたら、すみにお地蔵さんがまつてあった。めいはそれに目をとめて、拝んでいくと言う。とびらが閉まっていたので、そのまま通り過ぎようとした自分が恥ずかしくなった。めいは、その小さい手でとびらをあげ、両手を合わせてなにやら一心に拝んでいる。わたしもいっしょに手を合わせた。『なんとやって拝んだの?』ときいてみると、色の白い、つばらなひとみのめいは、『カミサマ、ナニモ、モッテコナクテ、ゴメンネ』と言ったんだと言う。わたしは一瞬心を打たれた。神や仏に『こうしてください、ああしてください』と言って、求めることばかり考えるわたしである。お地蔵さんにおみかん一つも持ってこなくてごめんねと言う幼子の心に、『よい子にしてください』と言って頼みなさいなどと、いらぬことを言わないでよかった。もしそんなことを言ったとしたら、こんな清らかな童心にふれることができなかったと、思わずその手を握りしめた」(松本幾子)

まさに、みごとな幼子の心! その澄んだ心は百万遍の大人の祈りにも勝る。年齢とともに欲深い願をかけることしか知らない大人の祈りとはおよそ桁はずれの透明な幼子の心の溢れに感動する。どの子供も同じではないとしても(まして、すでに老骨の私のようなものには、残念ながら、そんな美しい言葉は思いも浮かばない)「童心、天に通ず」とも言われる。事実、それと似た言葉はいつも聖書や聖典に見られる。

いくつかの例を取り上げてみよう。

「天地の主である父、わたしはあなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを知恵ある人や、賢い人に隠し、幼いものに現わしてくださいました。そうです。これはあなたのみ心でした」(マタイ11、25 ルカ10、21)

「イエスは幼子呼び寄せ、弟子たちのまん中に立たせて言われた。“あなたたちによく言っておく。あなたたちは心を入れかえて幼子のようにならなければ天の国には入れない”」(マタイ18、2-3)

さらに、東洋の古典にもそれに関連する意味深い言葉がいくつも見られる。例えば、西暦以前にさかのぼる中国の聖哲、老子の深邃な思想には「嬰兒復帰」という基礎理念が根底にあり(参照『老子』55)、鎌倉仏教の高僧、親鸞上人の「智者遠離」という言葉も、上記の聖書の教えに見事に呼応する(『歎異抄』12)。

現代の人生詩人の中にも幼子を賛美する美しい詩がある。「あそび」と題した北原白秋の詩がある。

あそびこそ尊とかりけれ。
まことよく惚れあそぶもの
神ぞただ嘉したまはむ。
まことにはあそぶ人なき。

身をあげてあそぶ童は
ひたむきに天もわずれぬ、
声あげて惚れてあそびぬ。
その声ぞ 神のものなる。

いと高きところにあそぶ、
そのどよみ天にいたらむ。
あそびこそ尊とかりけれ、
よく遊べ、みほとけのごと。

(北原白秋『水墨集』新潮社)

同じ「遊ぶ」といっても、大人の場合にはよい意味にならない。「遊んでいる」といえば、大人の場合、「働かないでブラブラしている」とか、昔の「遊郭」とか低次元の言葉になってしまう。中次元の場合は、「暇」とか、「空地」のような場合に用いられる。

奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。

48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年より2001年までバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。現在、京都聖母学院短大名誉教授。

著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所)など多数。

子供の場合には全く違う。「よく学べ!よく遊べ!」と励ます言葉になる。つまり「頭も体も元氣になれ」ということ。「心身一如」という仏教語にさえ近い。

神と遊べる特権は子供にしかないかのようにである。大人になってしまつと、神様とのつきあいが下手になり難しくなってしまう。この世のことばかりに身も心も奪われてしまうためののだろうか。情けないこと。悲しいこと。それについて、とてもよい詩をいくつも残してくださった高田敏子さんの一つの詩がある。

祭り

「あれ なアに?」

「おみこし」

「おみこして、なアに?」

「神さまのお乗りもの」

「神さまって?」

さあ、なんとこたえましょ

とにかく

神さまは子供がお好きで

子供はお祭りが大好き

きょうもどこの町では

晴れ着をきた子供たちが

神さまと遊んでいる

神さまは肩のはる大人との

おつきあいから解放されて

雲よりおいしい綿菓子

なめていっしょにちがいない

(高田敏子『高田敏子詩集』花神社)

P.G.I.のお知らせ

・三好耕三 写真展「櫻」

Kozo Miyoshi "SAKURA"

4月1日(火)

- 25日(金)



・奈良原一高「天」 Ikko Narahara "HEAVEN"

5月8日(木) - 30日(金)

・常設展 Edward Weston

6月4日(水) - 27日(金)

* 休館のお知らせ 4月29日 - 5月5日まで休館致します

フオ・ギャラリー・インターナショナル

東京都港区芝浦4-12-32 TEL.03-3455-7827 FAX.03-3455-8143

JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分

【営業日】月 - 金 11:00 - 19:00 【入場無料】

【休館日】土・日・祝日

* P.G.I.についての詳しい情報はホームページ(<http://www.pgi.ac>)をご覧ください。

表紙の言葉



写真: フランコ・メン
ベジャール、パキスタン 2001年

子供を連れてアフガン女性、市場にて
2001年4月

「...その気にならなければ女性の姿は目にとまらない。その衣装は、歩き方と同じく、目につかないためのものなのだ。おもしろいことに、ブルカを着ている女性は、ベールをかぶっている女性よりも自由闊達に歩く。ブルカは頭から足の先まですっぽり包む。頭部を完全におおって、目のところだけアミ状に小さくあけ、身体にまとわりつき、歩くときと風にたびく。そのなかで女性はまったく別の世界にいる。眺めているのは女性の方だ。彼女は人に見られたいし、実際目にとまらない。...」

『アフガニスタンの風』ドリス・レスリング(晶文社刊)より